侃斯達篤

巻之五

ヤ4
1435
5

慶應元乙丑歲仲夏新雕

T4
1435
5

坪井信良譯

侃斯達篤内科書

江都醫學所諸先生著篇製本俱全九四方君子賜雲顧者
須認每部印章方是正本發兌書肆江左老皂館主人謹白

卷之五
卷之六

91-2050

吳秘藏圖書

侃斯達篤卷之五

侍醫法眼　坪井良信良譯

水腫

水腫ハ、他病ノ續症ナリ、其字義、亦水液瀦留スルヲ表スルノミ、未タ以テ原因、及ヒ病狀ヲ知ルニ足ラス、

症候

一所在、水液瀦留スル部ハ、外圍ハ全ク被包セル内部諸分泌器、沕乙膜組織是ナリ、此沕乙膜平時

西村之藏圖書

既ニ體中ニ在ルアリ、又病性成形カニ由テ、新ニ發成スル者アリ、皮下組織、粘液膜下、汎乙膜下、疎鬆ナル巴連舍麻質、肺藏、喉舌等ハ、水液ノ瀦留スル所ナリ、

平時ロヲ外部ニ開クノ空隙、其漏泄ノ道閉塞シ、或ハ麻痺スレハ、水液瀦留ス、故ニ輸尿管閉塞スレハ、腎盂膨脹シ、水液瀦留シテ腎水腫トナル、膀胱水腫、胃水腫、子宮水腫、膽水腫、唾管水腫、涙囊水腫、皆同シ、腹膜皮下組織、水液最モ瀦留シ易ク、次之睾丸莢膜、胸膜、肺質、心囊關節空隙、腦腔等ナリ、

二 瀦留スル水液ハ、固ヨリ平時空隙内ニ分泌スル者ト異ナルヿナシ、但シ平時ハ瀦留スルヿナク、稀薄ニノ點滴體トナラサル者、今其質ヲ變ス、故ニ汎乙膜ニハ汎乙、腎及ヒ輸尿管ニハ尿、唾管ニハ唾液、膽藏ニハ膽汁、及ヒ粘液瀦留スルナリ、但シ、此水液、一ニハ其原因ニ由リ、一ニハ溶解スル等ニ由テ、諸般ノ變ヲ爲シ、又膿汁、列印巴、血等ノ混スルニ由テ、膿性、列印巴性、血性水腫等ノ別アリ、

汕乙膜ノ空隙ニ瀦留スル汕乙液、各般ノ變異アリ、

一 其色、全然無色、清澄水ノ如ク、或ハ橙黄緑色、或ハ淡紅、濃紅ナリ、蓋シ血ノ赤分、或ハ膽汁質溶解シテ混スルニ由ルナリ、

二 其質、稀薄或ハ濃厚、糜ノ如ク渾濁、曇暗、纎維質、線狀質ヲ混シ、或ハ膠ノ如シ、蓋シ此稀稠ハ、纎維質、卵白、膿體、表皮細胞體等ノ多寡ニ由ルナリ、

三 舍密性質、水液ノ舍密性ハ全ク血汕乙ニ同シク、水、卵白（其量ハ、血汕乙ノ如クナラス）、塩分、游離セル灰塩ヲ含ミ、俄カニ凝結セス、温暖、酸類、亞爾箇兒、越列機ニ感レテ、始テ凝結ス、卵白ノ量多少一ナラス、或ハ全ク之ナキアリ、越幾斯性粘質ヲ含ムヿ最モ多シ、又其舍密性、總テ膿ニ同シキアリ、或ハ膽汁質、尿質、血體等ヲ含ムアリ、卵白質多ケレハ泡沫ヲ生シテ、石鹼水ノ如ク、指頭ニ粘シ、或ハ卵白ノ如シ、

四 顯微鏡ニ照スニ、水液中成形物アリ、則チ滲出液、膿體、表皮細胞、膽汁質ノ結晶體等ナリ、水

腫瘍ハ、外貌大ニ眞ノ水腫ニ似タレ𪜈、自ラ別アリ、本條ニ於テ詳説スヘシ、

上ニ記スルカ如ク、水液性質數樣ノ差異アル原ハ、未タ之ヲ詳ニセス、其瀦留スル空隙ノ底面、瀦留スル遲速、之ヲ發スル原病、大ニ關係スル者ナリ、卵白質ノ量ハ、急性水腫ニ多ク、慢性水腫ニ少ナシ、殊ニ急性水腫ハ、汎乙中ニ凝結性滲出液、又黄色ノ細胞片ヲ混ス、而メ更ニ多量ノ膿體ヲ混シ、黄色或ハ緑色ヲ現スルアリ、慢性水腫ハ、汎乙中凝結性滲出液ヲ含ムヿナク、或ハ之アルモ少ナシ、

三　水液瀦留シテ、其部ノ組織ヲ膨脹スルニ由テ、壓重、窘迫、牽張等ノ不快ナル疼痛ヲ發ス、

水液ニテ壓迫スル部局ハ、其機能ヲ失ス、胸水ハ呼吸ヲ妨ケ、心囊水腫ハ、心藏縮張ヲ妨ケ、腹水ハ消化機ヲ害シ、遂ニ痳痺セシム、此ノ如ク機能ヲ失スルハ、其理知リ易ク、更ニ膨脹スレハ近傍部ニ及フ、故ニ腹水ハ横膈ヲ横排シテ、胸腔狹窄トナリ、呼吸緩暢セス、且ツ水液迅速ニ瀦留スル者ハ、機能ヲ妨クルヿ愈甚タシ、然

レ此、瀦留スルヿ徐ニメ壓迫ニ慣ル者ハ、膨脹意外ノ大ニ至ルモ、其機能ハ全ク麻痺スルニ至ラス、腦ノ急性水腫ハ、昏睡、嗜眠ヲ發ス、

四 水液柔靭ノ部ニ瀦留スレハ、腫瘍トナリ、其部ノ柔靭、組織ノ疎鬆ナルニ從テ、自家ノ重力ヲ恣ニシ、下部ニ低垂ス、故ニ脚ヲ垂レ、或ハ久シク起立スレハ、兩脚浮腫シ、平卧スレハ、上部ニ集積シ、胸水、腹水、皆低下ノ側ニ集積スルナリ、其部ノ圍包軟ニメ、彈力アリ、且ツ手ノ觸レ得ヘキ部ニハ、波動ヲ知ルヘシ、

五 諸排泄 腎、皮膚、腸、大ニ減少シ、皮膚糙澁、獸皮ノ如ク、大便秘閉、渇甚タシク、粘液膜分泌液濃厚トナル、

多クハ小便ノ量足レリト見ユルモ、之ヲ飲液ノ量ニ比スレハ少ナシ、始メ皮膚ノ分泌減少シ、次テ腎腸ニ及フ、水腫ノ部ニ分泌増多スルモ、未タ以テ平時分泌ノ減少ヲ償フニ足ラス、瀦留スル汎乙ノ量ハ、平時分泌ノ量ニ比スレハ、遥ニ少ナケレハナリ、或ハ尿質大ニ其含窓

性ヲ變シ、卵白質ヲ含ムヿ多シ、是レ腎病條下ニ詳說スヘシ、

六 血質變異、水腫ノ原因ナルアリ、又續症ナルアリ水腫、實性、虛性ノ別アルニ由ル、實性ノ者ハ、燃衝性諸症、殊ニ補給過多ノ症アリ、虛性ノ者ハ、血ノ異重少ナク、汎乙多ク、卵白質、纖維質少ナク、且ツ器底ニ沉降シテ、球ノ如シ、但シ血水ノ量ニ比スレハ少ナシ、或ハ大ニ凝性ヲ失シ、纔カニ膠ノ如ク、軟ナル粘物アリテ、渾濁乳狀ノ汎乙中ニ浮泳スルアリ、

ベキュエレル氏、ロジール氏ノ試驗ニ據レハ、滋養減少、ブリクート病、脫血、癌腫、又皁濕病ヨリ發スル惡液性水腫ニハ、卵白質、血體減少スルヿ甚タシク、器械性因ニテ、血行ヲ妨クルヨリ發スル水腫ハ、之ニ及ス、

血液調和ヲ失スレハ、隨テ筋力、神經力萎衰シ、皮膚滲淡、肌溫減少、慢性、虛性水腫、瘦削、諸機衰脫ス、其原病、其部位、其廣狹ニ由テ、併發スルノ諸症、及ヒ解剖症候、大ニ異ナリ、共ニ各病條下ニ於テ詳說スヘシ、

原因

水液集積スルハ、其分泌ト排泄トノ平均ヲ失シ、分泌増多シテ、排泄減少シ、或ハ閉止スルナリ、腎水腫、膽嚢水腫、共ニ排泄管ノ閉塞ヨリ來ル者ニテ、第二症ノ例トナスヘシ、而ノ兼テ第二因、水液分泌増多スルアリ、其分泌増多スル所以ノ原因、最ナル者ハ、

一器械性原因、静脈血行遅滞、静脈幹或ハ枝出血、瀉血後ニ生スル凝血閉塞、近傍ノ腫瘍ニテ静脈壓迫、空隙濶大、心室障膜殊ニ右室障膜疾患、

例之、妊孕ノ子宮、胯静脈上ノ腫瘍、又其静脈凝血閉塞等ハ、脚腫ヲ發シ、門脈及ヒ其枝末閉塞スレハ、腹水ヲ發ス、水腫ノ廣狹ハ、其部位ニ由リ、又静脈血行ヲ妨クル因ノ大小ニ由ル、故ニ水腫ノ部小ナルアリ、又極テ大ナルアリ、下行大静脈閉塞、心藏器械病ニ於テハ、水腫大ニ蔓延ス、但シ血液ノ還流ヲ復スレハ、自ラ消散スルナリ、四肢水腫ヲ見テ知ルヘシ、

心藏機能減少スレハ、静脈ノ血行遅滞シ、静脈中凝血ヲ生シ、ソイテ水腫ヲ發ス、經久虚憊ノ病末水

腫皆之ヲ以テ説クベシ、

二　血液變性、方今大ニ行ハル所ノ流體病理家輩ハ、大ニ此原因ヲ主張ス、上ニ記スル諸症、血液異重減少、卵白質、血體減少、水分増多ハ、何レノ水腫ニモ之アルニ非ス、又之アル者、必ス水腫ヲ發スルニ非ス、水腫ノ誘因ハ、滋養不給、濕潤汚穢ノ氣、卑低濕潤ノ地、幽囚、禁獄、漏泄過多、慢性脱液、出血、下利、慢性中毒、砒毒、汞毒、萎黄病、失荀児陪苦、頑固間歇熱、脾腫ヲ兼ル者、癌毒、肝、肺、腎ノ慢性諸病等ナリ、凡テ此諸病ニ於テハ、血液調和ヲ失シ、兼テ脈管凝收

カヲ失シテ脆薄トナリ、汎乙ヲ滲出スルヿ多ク、又神經力衰弱ス、此時兼テ心藏、及静脈中ニ器械性障害アル者アリ、人之ヲ注意セサル者多シ、マゲンジー氏、曾テ活獸ノ静脈中ニ、水ヲ注入シテ、水腫ヲ發セシヿアリ、是レ但シ以テ證トナシ難シ、何トナレハ、此ノ如クスレハ、血液ノ全量増多シ、水液ヲ漏泄スルヿ隨テ増多トナレハナリ、又刺絡ニ由テ集積スル水液消散スル者アリ、

上ニ説クカ如ク、脈管弛緩スルカ、或ハ他因ニ

由テ、神經衰弱スレハ、汎乙滲出スルヿ多シ、故ニ神經幹ヲ損傷スルノ部、不遂ノ四肢ニ水腫ヲ發ス、又歇私的里家、一時水腫ヲ發スルヿアリ、是レ脈管神經、一時ノ麻痺ニ起ル所ナリ、

三 各部組織、殊ニ汎乙膜、急性性水腫、又ハ、急性水腫、ハ、燃衝ノ作用ニ出ルノミ、本條ヲ併セ考フヘシ、腹膜燃衝ノ續症ナル腹水、胸水、頭水腹部慢性燃衝ノ續症ナル皮水腫等是ナリ、

四 水腫、其原因未タ詳ナラサル者アリ、則チ、一襲替水腫、經行閉止後、發疹、腫瘍白帶下愈後ニ發スル者、恐ラクハ襲替多クハ發疹ト兼子起ル、諸家說アレ氏、臆斷ノミ、故ニ今之ヲ掲ケス、

二 僂麻質性水腫、猩紅疹水腫

舊說ニ隨テ、虛實ノ性ヲ以テ水腫ヲ區別スレハ、則チ上ニ記スルノ第一種、第二種ハ、虛性ニ屬シ第三種ノミハ、實性ニ屬シ、第四種ハ實性ナルアリ、又虛性ナルアリ、故ニ此二症ハ、其誘發ノ原因ニ由テ別ツヘシ、他ノ鑒別ノ徵ハ、

實性水腫

必ス先ツ衝動及ヒ抵抗

虛性水腫

諸症緩慢、熱ナク、末端ノ

アリテ前發シ、或ハ之ト部厥冷、兼發ス、發熱、肌温增進、渴、脈數、强、或ハ神經諸症、痙攣、疼痛、

經過多クハ迅速　經過緩慢ナリ、

血液燃衝狀ナリ、　血液稀薄ナリ、

水液中凝固性分多ク、或ハ膿ヲ含ム、　水液中水分多ク、澄清白色ナリ、

消燃法効アリ、　消燃法害アリテ、强壯法効アリ、

水腫其初發ハ實性ナルモ、水液久シク潴留シ、刺衝、抵抗消除シ、隨テ虛性水腫ニ轉スルヿアリ、故ニ唯其病ノ發起スル時ノミ實性ニメ、水液集積スルニ及テ、單純虛性トナル者ナルカ、將タ實性ノ抵抗持續シ退カサル者ナルカヲ辨別スヘシ、

水腫ノ素因、

一　年齒、年齒ノ各期ニ於テ發スル所ノ水腫、各種ノ症狀アリ、小兒ハ頭水ヲ發スル類、

二　婦人殊ニ經行始テ通スル時、又絶止スル時

三　體格、粘液質、脂肪過多、身體過重、諸部大小平均ヲ失スル者、腹藏大ナル者ハ、腹水、胸肋佝僂ノ者ハ、

胸水ヲ發スルカ如シ、又水腫他ノ分泌ニ襲替スルヿアリ、弛緩ノ者ニ於テ殊ニ然リ、例之、小便減少、蒸氣減少ノ時ノ如シ、

四　流行氣性、霧氣中水分ヲ含ムヿ多ク、雲霧昏冥、寒暖急轉、電氣減少等、或ハ時令ニ由テ慢性病ノ終歸、多ク水腫トナルアリ、

經過及終歸、

水腫ノ經過ハ、緩慢ニシテ熱ナキ者最モ多シトス、唯急性水腫、燃衝性水腫ト稱スル者（猩紅疹ブリクト病後水腫、）ハ、經過迅速ニシテ、多少熱性諸症ヲ發ス、又貴要部ノ水腫ハ、其機能ヲ障害シ、速カニ死ニ陷ル者アリ、（肺水、頭水、）

水腫治法ノ最要ハ、集積スル水液ヲ消散シ、分泌、排泄、吸收ヲ平均セシメ、新ニ水液ノ集積ヲ生スル誘因ヲ除クナリ、凡ソ慢性諸病ニハ、分利顯著ナラス、故ニ水腫ニモ分利機能ヲ發スルハ、極テ稀ナリ、但シ其分利機能ノ理ハ、未タ詳カニセサレ氏、必須緊要ノ者ニシテ、多クハ卒然トシテ發見スルナリ、

分利アル者少ナカラス、（醫治ヲ加ヘサル者ニモ之アリ、）多ク

ハ發汗、利尿、下利ヲ以テス、卒然トノ驚クヘキ多量ノ水液ヲ漏泄スル者、屢之アリ、然レモ此ノ如キ暴劇ノ排泄ハ、必シモ良績アルニ非ス、或ハ救フヘレト見ユルノ患者モ、頓カニ斃ルヿアリ、水液或ハ異常ノ道路ヲ開キ、漏泄スルヿアリ、則チ偶然ニ嘔吐、流涎ヲ發シ、婦人ハ膣ヨリ漏泄シ、足部或ハ陰囊ニ水泡ヲ發シ、破裂シテ水液ヲ漏スアリ、臍或ハ腹皮破裂スルヿアリ、水腫愈後、常ニ再發スルノ僻ヲ遺ス、凡ノ水液ノ刺戟ヲ受クル部ハ、感覺鋭敏ナリ、蜂巣體質水腫ノ如キハ、分泌ノ二面相愈合シ、空隙消滅スルニ非サレハ、全治スルヿナシ、

水液ヲ被包スル部ハ、燃衝變質、消滅シ、内藏ハ相愈着ス、或ハ漏泄スルノ液ヲ頓カニ吸收シテ、恰モ水液ヲ静脈中ニ注入スルカ如キ諸症ヲ發スルヿアリ、則チ患者煩悶極テ甚タシク、諸力頓カニ衰脱シ、卒中ヲ發ス、或ハ甲部ヨリ吸收シ去テ、俄カニ乙部ニ集積スルヿアリ、胸腔内ノ水液消散シテ、忽チ呼吸窒息スルカ如シ、

水腫ニテ死スルハ、或ハ原病ノ續症ナルアリ、或

ハ水液貴要部ヲ壓迫シ、其部ノ機能麻痺スルニ由ルアリ、或ハ敗血ニ由テ衰脱シ、内部器械變性、及ヒ消耗熱ニ由ルアリ、溶崩性分泌、殊ニ下利是ニ屬ス、熱多クハ腐敗性ヲ帯ヒ、譫妄、精神昏蒙、灼熱、腐敗ノ諸症アリ、皮下組織水腫、四肢水腫ハ、皮膚潰爛、汚穢、暗赤色ヲ發シ、速カニ腐敗ニ陥ル者多シ、或ハ死ニ陥ルアリ、

預後

大ニ原因ニ係ルナリ、靜脈壓迫閉塞ヨリ發スル水腫ハ、固ヨリ危險ナルヿナシ、殊ニ他ノ全身病ヲ兼子サル者亦然リ、又下行靜脈ノ如キ大幹ニ

關係セサル者最モ然リ、脈管閉塞スルヿアルモ、近傍ノ脈管、能ク之ヲ攝取シテ償フニ足ル者ハ、水腫自ラ消散スルナリ、心藏器械病ニ由ル水腫ハ、治法宜シキヲ得テ、一時或ハ消散スルモ、復ク再發シ終ニ斃ル、熾衝性、急性水腫ハ、總テ慢性水腫ヨリハ良ナリ、但シ其部位ニ由リ大ニ危險ナル者アリ、肺水、腦水、敗血癌腫、失苟兒陪苦、間歇熱後、又酒客ノ敗血ニ兼發スル水腫ハ、極テ治シ難シ、但シ輕易ノ乏血ニ併發スル水腫ハ治スヘシ

二部

位ニ由ル、皮水ハ腹水ヨリ易ク、腹水ハ胸水ヨリ

易シ、或ハ不治ノ症ナレ𪜈、患者能ク久シク之ニ堪フル者アリ、

三 分泌器ノ景況ニ由ル、分泌愈少ナキハ愈險ナリ、惡徵ハ、小便短少、暗濁、惡臭アリテ、濃赤、或ハ紫色ノ塗渣膠シキ者、皮膚糙澁乾燥、獸皮ノ如キ間ハ、決シテ全治スルヿナシ、又佳徵ハ、發汗、利尿、下利ナリ、但シ分泌溶崩性ニメ、回復ノ徵ナク、尿崩、泄瀉等ハ、惡徵ナリ、血液溶崩、全身衰弱、抵抗微々ナル者ハ、愈危シ、皮色大ニ變シ、汚斑ヲ發シ兩脚羅斯狀ナルハ、惡徵ナリ、又患部ノ廣狹、經過ノ長短、及ヒ外科術ヲ施コシ得ヘキト、能ハサル等ニ由テ、良否ヲ決スヘシ、

治法

第一、水腫ノ原因治法ヲ施コスヘキハ、其原因今尚存在スル者、又之ヲ知ルヘク、且ツ除去シ得ヘキ者ノミナリ、之ニ處スルノ法如何ハ、水腫ヲ發スルノ病狀ヲ探索スルニ在リ

發疹内陷、痛風毒、又平時ノ分泌閉塞シテ、汚乙膜ニ轉移スル者ハ、原病ノ部ヲ刺戟シテ勉メテ之ヲ誘起スヘシ、血液變敗スル者ハ、各自敗血對證ノ治ヲ施コスヘシ、腫瘍アリテ靜脈ヲ

壓迫シ、水液瀦留スル者ハ、其腫瘍ヲ排除スヘシ、多血ハ之ヲ放出シ、便秘スル者ハ緩下劑、峻下劑、植物汁、水銀劑ヲ用フ、間歇熱後ノ水腫ニハ、吉那、規尼、鋏劑ヲ處ス、水液ヲ漏泄スルノ後、始テ原因ヲ知ルヘキアリ、又始テ之ヲ除クヘキアリ、又患者ノ體質ヲ察スヘシ、是レ大ニ治法ヲ異ニスルアリ、

第二、水腫本態ノ實性（燃衝性水腫）虚性ニ從フ、燃衝性刺衝アリテ發スル水腫、又之ト併發スル者ニハ消燃法ヲ處スヘシ、虚性水腫ニハ、强壯衝動法ヲ處スヘシ、實性水腫ニハ、他ノ諸法ヲ施コスノ前ニ、先ツ消燃法ヲ施コスヘシ、以テ全治ヲ得ル者少ナカラス、虚性水腫ニハ、瀦留スルノ水液ヲ漏泄スルノ後、始テ强壯治法ヲ施コスヘシ、水腫虚實ノ性ニ從テ、各人ニ適應スルノ藥品ヲ撰フヘク、又患者ノ攝生法ヲ定ムヘシ、故ニ排泄劑ニモ、亦消燃性ト、衝動性トノ別アリ、甲種ニ屬スル者ハ、刺絡、中和塩、甘汞、輕量ノ吐酒石、兼テ清涼ノ食餌ナリ、乙種ハ、苦味劑、吉那、鋏、漸次ニ其量ヲ增加シ、而シテ芳香及ヒ揮發ノ衝動劑ヲ配用ス、就中麥

黄病治法條ニ記スルノ法則ニ從フ、

直治法ハ瀦留スル水液ヲ漏泄スルナリ、或ハ此法ニ據テ全治ヲ得ルアリ、又水液ヲ漏泄スルノ後、始テ他法ヲ施コシ得ヘキアリ、之ヲ漏泄スルニ、尋常ノ道路、腎、腸、皮膚ノ分泌ヲ催進スルアリ、又人工ニテ新路ヲ開クアリ、庸醫ハ對徵、反徵アルニ注意スルヿナク、妄リニ利尿劑ヲ處シ、以テ速カニ水液ヲ體外ニ漏泄セントト欲ス、是レ大ニ理ニ戻レリ、抑モ何レノ道路ヨリ、何レノ法方ニ由テ、水液ヲ漏泄スヘキヤヲ撰フヿ、必須ノ要件ニノ、且ツ効否ノ別アル所以ナリ、故ニ醫者須ラク古來歴驗シ得ルノ法ニ就テ、之ヲ撰フヲ急務トス、又各自ノ症ニ對シテ、之ヲ求ムヘキヿ、固ヨリ醫ノ任ナリ、故ニ先ツ尋常分泌ニ由テ、水液ヲ漏泄スルノ法ヲ説クヘシ、總テ先ツ緩力品ヲ用ヒテ、漸次ニ其量ヲ増多シ、漸ク强力品ニ及フヲ通則トス、

最モ着目スヘキハ、患者ノ體質、及ヒ漏泄スヘキ部、固有ノ刺衝機ナリ、凡ソ藥劑ハ、各人ニ同効アル者ニ非ス、故ニ同一利尿品モ、甲人ニ於

テハ無比ノ貴藥ト稱スヘク、乙人ニハ微効ナキ者アリ、又利尿劑ヲ用ヒテ、嘔吐、下利ヲ起シ、下劑ヲ用ヒテ、大ニ利尿ヲ得ルヿアリ、又大量ニシテ効ナク、輕量ニノ良効ヲ奏スル者アリ、又強力品ヲ用フルヿ久シクノ効ナク、緩力品ヲ用ヒテ、効ヲ得ルヿアリ、故ニ之ヲ用ヒテ患者輕快ヲ告ケス、醫者亦其必然ノ効ヲ見サルヿハ、妄リニ自家偏信スル所ノ法ヲ持久スルヿ勿ルヘシ、病ノ時期ニ由リ、又久シク服藥スル者ハ、分泌器ノ刺衝機衰脱シテ、麻痺スルニ

至ル、然ルキハ其部ニ各種ノ新刺戟ヲ施コシ強力利尿劑ヲ用フルモ効アルヿナシ、此ノ如キ者ハ、少時間身體ヲ靜養シ、諸藥ヲ休止シ、後緩力品ヲ用フルキハ、抵抗ヲ發シテ、効ヲ得ルヿ屢之アリ、又腎、皮膚、腸ノ一道ノミヨリ、水液漏泄ヲ促カサントスルヿ勿レ、醫ノ治ヲ施コスヘキ道路、數條アリ、又尋常治法施コシ盡メ効ナキ者ニ非常相反スルノ法ヲ處シテ、良効ヲ得ルヿアリ、諸排泄劑中、衰弱ヲ遺スヿ甲乙相異ナリ、凡テ利尿劑ハ衰弱セシムルヿ少ナ

シ、下劑及ヒ發汗劑ハ、長服シ難シ、但シ利尿劑ハ、其効下劑ノ如ク確實ナラス、故ニ庸醫ハ、患者ニ對スレハ、常ニ下劑ヲ與ヘント欲ス、抑モ頑固ノ水腫ニハ、下劑ヲ用フルニ非サレハ、必然ノ効ヲ得ス、殊ニ病ノ初期、患者未タ衰弱セス、經久慢性ノ者、腹水ニハ適應ス、南方諸地ニテハ、他ノ分泌機能ヨリハ容易ニ下利ヲ發ス、又强力下劑ヲ用フルノ後、小便快利ヲ得ル者少ナカラス、但シ下劑ハ連用シ難シ、總テ下劑ハ、健康保生ニ必須ナル要物ヲ漏泄シ、血液製造ヲ障害ス、是レ其根基タル胃腸ヲ衰弱セシムレハナリ、故ニ下劑ヲ用ヒテ消散スル水腫ハ、復タ速カニ集積スルヿ、他法ヲ以テスル者ニ過ク、凡ソ衰弱甚シキ者、消耗下利ニ續發スル水腫、痢疾ヲ兼ル者、下利アル者、内藏衰弱ノ者ニハ、下劑ヲ處スルヿ勿レ、胸水ニハ妄リニ下劑ヲ用フルヿ勿レ、又下劑ヲ撰フニ常ニ强力品ヲ要スルヿ勿レ、腸ノ感覺鋭敏ノ者ハ、却テ之ヲ漏泄セスメ秘閉セシム、

腎ノ機能ヲ增多スルヿ容易ニメ且ツ確實ナ

ル者ニハ、漏泄ヲ此道ニ取ルヲ最モ佳トス、衰弱虚脱スル者ニモ、多量ノ尿通害ナシ、衰弱下利アル者ニハ、利尿劑ヲ單用スヘシ、腎ハ厥衝運營ヲ鎮靜スルノ最要器ナリ、胸水ノ分利スルハ、此道ニ由ル者最モ多シ、病ノ時期、及ヒ其部位ニ由テ、腎ヨリ排泄スルヲ最モ佳ナリトスルヿアリ、阿芙蓉ヲ配用シテ、利尿劑始テ効ヲ奏スルヿアリ、但シ阿芙蓉ノ効ヲシテ唯ニ腸ニ達セシメテ、腎ニ及ハサラシムルヲ要ス、腎、及ヒ尿道刺衝性、厥衝性ノ者、又器械變質ノ

者ハ、利尿劑ヲ禁ス、

發汗劑ハ功用廣カラス、大發汗ハ大ニ衰弱ヲ遺ス者ナリ、又身體空隙内、水液瀦留多キ者ニハ、用フルヿ勿レ、皮水腫、僂麻質因ノ水腫、或ハ流行性、地方性ニ由テ發スル水腫ニノミ用フヘシ、皮膚硬固ノ者ニハ、用フルヿ勿レ、發汗劑單用シテ効ナキ者ハ、多品ヲ配用シ、或ハ强壯品ヲ兼用シテ効アリ、或ハ發汗劑、或ハ利尿劑、或ハ下劑ヲ交換シ用フヘキアリ、但シ確定ノ考案ナクシテ、妄リニ諸劑ヲ交換シ用フルハ、

賣藥客ノ名ヲ免カレス、醫宜シク此ノ如クナルヿ勿ルヘシ、

一 利尿劑二種ノ別アリ、消煩性、衝動性是ナリ、甲ハ急性症ニ宜シク、乙ハ慢性症ニ宜シ、消煩性利尿劑ノ最ナル者ハ、中和鹽、純精酒石、孕蓬酒石、酒石葉、硒砂、及ヒ亞爾加里ナリ、急性水腫ニ用フ、又慢性水腫ノ煩衝狀症ヲ兼ル者ニ、强力利尿劑ニ配用スルヿアリ、純精酒石、硝石、及ヒ亞爾加里諸劑、最モ偉効アリ、

消煩性利尿品ヨリ、衝動性利尿品ニ轉移スルニハ、實芟荅里斯ヲ最佳トス、是レ先哲ノ大ニ稱スル所ナリ、

刺戟性、衝動性利尿品中、魁タル者ハ、海葱ナリ、

海葱ノ利尿ノ効ハ、赫々タル所ナレ𪜈、之ヲ用フルニハ最モ精意ナルヘシ、發熱、刺衝、胃力失宜、便秘腸ノ感覺過敏、下利ノ僻アル者、又下利嘔吐スル者ニハ害アリ、慢性弛緩症ニ効アリ、惡心アル者ニ海葱ヲ施用スルニハ、諸家說ヲ異ニス、ヒンドト氏海葱ヲ用フルノ良法ヲ定ム、曰ク、之ヲ輕量ニシテ、終日用フルヿ勿レ、唯

一日一回、殊ニ夜間臨卧ニ、半氏ヲ頓服シ、毎夜半氏宛増加ス、之ニ由テ小便快利ス、又悪心ヲ發スル者ハ、其量ヲ減シ、或ハ少時之ヲ退ケ、再ヒ輕量ヨリ始ムヘシ、之ヲ末服スレハ嘔吐及ヒ下利ヲ起シ易シ、胃ヲ衝動スルヿ甚シキカ故ニ、芳香品、或ハ苦味品ヲ配用スルヲ佳トス、越幾斯劑、又醋蜜ハ、其効緩ナリ配合ノ最モ佳ナル者ハ、炭酸加里ト海葱醋劑トノ飽合劑、又海葱丁幾劑ナリ、

之ニ次ク者ハ、格爾失屈謨ナリ、但シ其効確實ナラス、

格爾失屈謨ハ、利尿ノ効ヨリハ、瀉泄ノ効多シ、格爾失屈謨醋蜜、毎用一食匙、一日三回、格爾失屈謨醋ヲ、炭酸加里ニ配用スルヿ、海葱醋ニ同シ、

方、格爾失屈謨丁幾、實芟答里斯丁幾、各二瓦 甘硝石精、一双 右毎朝夕、二十滴、糖ニ和用ス、ヒルデンブラント氏、格爾失屈謨酒、ウェンドト氏

次テ他ノ葱類、大蒜 又杜松子、帝列並底那、

衝動利尿品中ノ最ナル者ハ帝列並底那ニ〆、

更ニ峻力ナルハ芫菁ナリ、杜松子ハ服シ易キカ故ニ、施用多シ、但シ單用スレハ効少ナケレトモ、他藥ニ配スルニハ佳品ナリ、

方、杜松子油、半戔甘硝石精、實芟答里斯丁幾、各三戔、

毎三時二十滴、至三十滴、

拔爾撒謨、及ヒ酷厲利尿品ノ動物ニ出ル者、芫菁、

芫菁ハ他ノ動物性峻劑ノ如ク、唯尿道ノ遲鈍ナル者、又無患ノ者ニ用フ入シ、衝動性ノ者ニ與フルヿ勿レ、施用宜ニ適スレハ、其効偉大ニメ、遙カニ他ノ利尿劑ニ超拔スル所アリ、但シ其効極テ不定ナリ、色攝飲料、乳劑、又阿芙蓉ヲ配用ス、輕量ニ始メテ、漸次ニ增加ス、但シ尿道疼痛アルカ、或ハ少シク疼痛狀ナル者ハ速カニ之ヲ退クヘシ、芫菁丁幾ハ、毎用五滴、至二十滴、一日數回、粘滑飲料ニ和用ス、

更ニ鑛屬鹽類、及麻醉品ニノ有力ノ利尿劑アリ、其効近世ノ創見ニテ、尚諸家ノ試驗ヲ俟ツ者ナリ、曰ク、鹽酸金、沃實涅、ヘラトリ子、及煙草ナリ

ヘラトリ子ハ、之ヲ施用スルニ最モ注意スヘキ一製劑ナリ、唯外用ニ供スルノミ、バルドス

レイ氏ハ、毎用四分氏ノ一、至一氏ヲ、一日數回、内服セシムレ氏、妥リニ之ニ倣フ勿レ、外用ハ、軟膏或ハ賢垤兒麻質私法トナス、頑麻甚シキ水腫ニハ、ヘラトリ子、五氏、至十五氏、脂、一匁、ニ和シ豆大ヲ取リ、塗入スル丁、五分時、至二十分時、一日三回、チュルンビュル氏、

以上記スル所ノ諸劑ハ、凡ソ腎藏ノ機能ヲ催進スヘキ者、又効アルヘキ者ニ用フル利尿品ナリ、但シ藥局庫中更ニ數品ノ利尿劑アリ、或ハ一時大ニ其名譽ヲ恣ニシ、復タ忽チ其聲ヲ失スル者百魯羅葉、加印加アリ、但シ以テ他ノ有力利尿品ニ配用スベシ、利尿劑内服、兼テ外用、灌腸、賢垤兒麻質私法ニテ、其効ヲ補佐スベシ、或ハ消化器疾患アリテ、外用品ニ非サレハ施コシ難キ者アリ、

方、實芟答里斯丁幾、海葱丁幾、各二匁、單用、或ハ水八匁、ヲ和シ、大布片ニ漬シ、腹上ニ置キ、蠟布ニテ之ヲ被フ、トロウスセアウ氏方、

又方、實芟答里斯葉、二戔、井水、適宜、ニ浸出シ、濾過ノ一匁ヲ取リ、帝列并底那油、薄荷水、各一匁、右調和

シ、鼠蹊、膀胱、腎部ニ塗擦ス、キーセル氏方、

又方、芫菁丁幾、硇砂精、各一戔 杜松子油、三戔、右調和シ、腹部ニ塗擦ス、コップ氏方、

二 利尿性下劑、亦利尿劑ノ如ク、消燃性、衝動性ノ別アリ、甲種ハ大量ノ中和鹽、甘汞、單用、或ハ大黃、藥刺巴ヲ配ス、大黃ハ衝動性ニ屬ス、

衝動性利尿劑ハ、多クハ峻下劑ナリ、嘗ニ大便ヲ通利スルノミニアラス、兼テ諸分泌器ノ水液分泌ヲ增多ス、最モ腎ニ於テス、則テ藤黃、越刺的留謨蘇甘母扭、格碌董篤、瓦刺扶、阿刺、墨列僕里、蒲里

阿尼亞、巴豆油、スピナヱセルヒナ舍利別ナリ、舍電華謨氏ハ、スピナヱセルヒナ舍利別一戔ヲ午食時ニ用フ、

方例、スピナヱセルヒナ舍利別、蒸餾水、各二匁 甘消石精、一戔、右調勻、每二時一食匙、

利尿劑ト下劑トノ配合ニテ、利尿ノ妙効アリ、以テ稱用スル者、少ナカラス、バセル丸、ヘイム丸、ヤニン丸等是ナリ、

ヘイム氏利水丸ノ方、

遏泥子越幾斯、海葱末、藤黃各二匁 右每粒二氏ノ

丸トナシ、二三時毎ニ一丸ヲ與ス、

三 皮膚ノ分泌ヲ催進スルニハ、尋常發汗劑、拕歇爾散、硇砂、龍腦、安質母ヲ用フ、其効力ヲ佐クルニ、兼テ薫劑、熱砂浴、熱灰浴、單蒸氣浴、揮發蒸氣浴ヲ施ス、諸氏賞用スル油質擦劑、亦之ニ屬ス、

古人賞用スル所ノ油質擦劑、其効實ニ驚クヘキ者アリ、則チ脂阿列襪油、麗春花油等是ナリ、スントベル氏ハ、近時大ニ之ヲ賞用ス、其法麗春花温油ヲ全身ニ擦入シ、油ヲ塗ルノ後、温メタル毛布片ニテ拭ヒ、且ツ撫摩シ、更ニ毛布ニテ全身ヲ被包シ、蓐ニ就カシム、此ノ如クスル

ヿ、毎日一回、

吐劑（殊ニ酒石、）吐ハ、大量ナルモ、又輕量ニメ催嘔セシムルモ、同一時ニ諸分泌（腸、腎、皮膚、）ヲ催進ス、胃ノ運營交感シテ、諸部ノ分泌ヲ增多シ、隨テ他ノ排泄劑始テ効ヲ奏スル者アリ、腸ノ粘液膜無患ナル者ニ、注意シテ吐劑ヲ用フレハ、實性、虚性水腫共ニ効アリ、

四 人工ニテ一新路ヲ開キ、水液ヲ漏泄スル者アリ、即チ穿開法ヲ行ヒ、以テ體中空隙ノ部ニ水液

瀦留スル者ヲ漏泄スルナリ、但シ空隙内ニ瀦留スル水液ヲ漏泄スヘキノミナルカ故ニ、各種ノ水腫ニ施用スヘキニ非ス、

皮下組織ニ道ヲ開ケハ、其組織内ニ瀦留スル水液ハ、蜂巣體ノ交通アルニ由テ、容易ニ漏泄シ去ルナリ、則チ此道ヲ開クニハ、發泡膏ヲ貼シ、水腫ノ部ヲ亂刺シ、又針刺シ、以テ或ハ自然ニ發スル妙機ヲ擬スルナリ、抑モ穿開法ハ、其創痕或ハ羅斯狀トナリ、或ハ寒壞疽ニ陷リ、以テ死ニ至ル者アルカ故ニ、極テ危險ナリ、亂刺法等ハ、小創ヲ生スルノミナレハ、之ヲ施用スルヿ容易ナリ、

術ヲ施コスニハ、水液淺所ニ在ル者、又心藏ヲ距ルヿ近カラサル部ヲ撰フヘシ、膝上、膀、陰嚢等ナリ、針ヲ下スハ、徐〻ニノ稍旋回スヘシ、但シ之ヲ施コスニハ、皮膚彈力ヲ失ハサル者、羅斯狀赤色等ヲ發セサル前ニ於テスヘシ、水液浸淫シテ、皮膚ヲ刺戟スルヲ防クニハ、其部ニ毎朝夕、阿列襪油ヲ塗ルヘシ、グラヘス氏、又創所ニハ鉛水ヲ温メ塗リ、且ツ其部ヲ安靜ニノ平置セシム、創所寒壞疽狀トナル者ニハ、吉那、没藥、

鉛水ヲ外敷シ、防腐劑ヲ内用セシム、脚腫消散セハ、繃帶ニテ之ヲ纏フ、

皮水腫、嚢水腫ニハ、或ハ微熱衝ヲ發セシメ、其分泌ノ表面ヲ消滅セシメテ、根治ヲ得ルアリ、

水腫病者ノ食餌ハ、病因、病性、時期、又水液ヲ漏泄セントスル部位ノ異ニ隨フヘシ、總テ消熱性ノ食餌ハ、消熱性利尿劑ノ効アリ、卑濕ノ地ニ居住スルニ由テ發スル水腫ハ、高燥ノ地ニ轉居スルニ非サレハ全治セス、血液溶崩性ナル者ニハ、新鮮、嫩軟、多液ノ蔬菜、天門冬、洋芹、草黄連、萵苣、蘿蔔等ヲ與ヘ、又灸リタル幼獸肉ヲ用フ、實性水腫ハ消熱性、虚性水腫ハ強壯性ノ食餌ナルヘシ、腎腸、皮膚ノ機能ヲ增多セントスルノ意ニ應シテ、泄利性、發汗性、利尿性ノ攝生ヲ命スヘシ、諸飲液ヲ禁スルノ法ハ、近世ビオルレー氏亦大ニ之ヲ稱スレ𪜈、諸家驗スル所、皆其害アルヲ説ク、清潔乾燥ノ空氣ハ、何性ノ水腫ニモ益アリ、

滋養增減諸病第三

滋養過多

組織及ヒ器械ノ病性滋養過多トナル機能ハ、健康ト大ニ相近邇スル者ナリ、健康機能ヲ以テ説クヘキノミ、之ヲ根基トスルノミ、故ニ曰ク、滋養過多ノ素因ハ、健康ナリト、實ニ滋養過多ハ、健康滋養ノ增多スル者ノミ、各自ノ器械健康發生ノ時ニ方テ、前時ヨリハ滋養增多スルヿアリ、妊孕ノ子宮、哺乳スル乳房ノ如シ、又使用スルヿ多キ器械、勞役スルノ筋ハ、滋養增多ス、獸類情慾發動

スル時期ノ間ハ、睾丸、子宮大ニ膨脹ス、是ヲ以テ健康ト疾病トノ區域、極テ相接スル者タルヲ知ルヘシ、

滋養過多トナル所以ハ、機性體細胞體ハ、固ヨリ逐次ニ成形スルノ機能ヲ具スルニ由ル、スクワン氏曰ク、各自ノ細胞體ハ、外部ヨリ之ヲ遮ルニ非サレハ、滋養質ヲ得テ膨大トナリ、又増多スルノ性アリト、凡ソ全身諸器ノ組織ハ、脈管、血液、神經、滋養液ヨリ成ル者ナリ、血液ハ網狀脈管ヲ流通スルノ液ナリ、滋養液ハ周緣凝固スルノ體ナリ、此凝固體ハ、細胞體成形ノ原ナリ、細胞體諸般ノ位置ヲ為シ、各種ノ形狀トナリ、且ツ凝固シ、同化スル體ノ有機舍密力ニ由テ、各部組織ノ微細ナル固有ノ形狀ヲ取ルナリ、

組織ニ於テ滋養機能ノ發成スル者ハ、血ニ非ス、脈管ニ非ス、又神經ニ非ス、唯凝固質、即チ滋養液中ノ凝固質ナリ、此凝固質ノミ過多トナリ、滋養増多スルナリ、故ニ組織器械ノ滋養過多ハ、其實質増多脈管、神經新生スルニ非スノ、唯此凝固質ノミ増

多スルナリ、之ヲ以テ滋養過多持久スレハ、終ニ脈管及ヒ神經平均ヲ失シ、物質大ニ肥厚トナルノ理ヲ知ルヘシ、

新脈管發生スルニ非ス、然レ𪜈滋養過多ノ部ニ在ル脈管膨脹スル亅屢之アリ、是レ滋養液ノ運輸増多スルニ由ル所ナリ、一腎滋養減少シテ、一腎滋養過多ナル者ニ於テ見ルカ如シ、カルス氏、

患部ノ脈管、神經、其近傍ニ瀦留スルノ凝固質、漸次ニ増多スルカ為ニ、壓迫セラレ、滋養減少シ、又消滅スル亅之アリ、平時營養發育ト、病性滋養増多トノ別ハ、甲ハ組織ノ諸物、脈管、神經、凝固質、皆齊シク増多シ、乙ハ唯一箇ノ凝固質ノミ、組織中ニ集積スルナリ、

其部ノ組織空隙、凝固質ヲ攝取スル亅愈容易ナレハ、愈滋養過多トナリ易シ、柔軟ノ部ハ、牢實ノ部ヨリハ大ニ膨脹ス、是レ皮下組織、粘液膜、滋養過多トナル亅多キ所以ナリ、組織中多量ノ凝固質ヲ漏泄シ、細胞體ヲ製造スル亅増多スレハ、疎鬆ノ者近接シテ緻密トナリ、海綿體組織、脾、陰莖、

廷孔ハ膨脹シ、其透明ノ性ヲ失シ、膨腫シテ白色或ハ灰白色トナリ、密接鬱積シテ線狀ヲ為シ、白色ノ片層トナル、組織緻密ナルノ極ハ、纖維質、軟骨狀ノ外貌ヲ取ルニ至ル、

滋養過多トナルヿ最モ多キハ、皮下組織、次テ脂肪膜ナリ、疎鬆ナル脂肪膜ニ於テハ殊ニ容易ナリ、或ハ全身ニ亘リ、或ハ一部ニ局ス、又乳房及ヒ諸筋實ニ滋養增多スルヿアリ、不隨意筋ニ於テス、隨意筋ニ於テスル者、未タ明證ヲ得ス、又内部諸器滋養增多スルヿ少ナカラス、子宮、肝、脾、副腎、甲狀腺、胸腺等ナリ、但シ知ルヘキノ要件アリ、夫レ真ノ滋養過多ハ、即チ肝、脾、心、又諸筋ノ各部、固有組織實質ノ增多スルハ、其部ノ周圍增大スル者少ナリ、而メ外貌膨大トナルハ唯組織中、病性滋養物ヲ排泄スルニ由ル者多シ、所謂汎乙膜、粘液膜、軟骨、硬骨、神經、皮膚、滋養過多ハ、真ノ滋養過多ノ如キ形狀ヲナシ、殊ニ皮膚某ノ部ニ於ケル者ハ、鑒別シ難シト雖、自ラ別アリ、局部症條下ニ詳說スヘシ、

解剖症候

一 滋養過多ノ部膨脹スルヿヲ得ヘキ者ナレハ、

必ス周圍増大ス、滋養増多スルノ部、其外容ヲ變セサルアリ、却テ平時ヨリハ縮小スルヿアリ、外圍増大トナリ、而モ内腔狹窄トナルアリ、或ハ充盈消滅スルアリ、一局部或ハ全部滋養過多ナルノ差アルニ由テ、形狀一ナラス、骨ノ滋養過多ナルハ、唯其固質増加シ、外貌ハ變スルヿナシ、

二 滋養過多ナルモ、其部固有ノ硬軟ノ性ニ由テ、自ラ別アリ、多クハ實質緻密トナル、殊ニ近傍ノ部、骨或ハ沟乙膜ニテ、其實質ノ非常ニ膨脹スルヲ遮ルヿハ最モ然リ、細胞體、列卵巴腺、腦等ハ、滋養過多ナルヿハ、大ニ其固質ヲ増加ス、滋養過多ノ部ハ、形狀大ナルモ、多クハ其異重ヲ増加スルヿナシ、

滋養過多ナル部ノ色ハ、其平時固有ノ色ニ由リ、其過多トナル物質ノ色ニ由リ、檢査ノ時期、其部血液ノ性質ニ由リ、又其部脈管緻密疎鬆ノ差異アルニ由ル、血液ノ性質ハ、平時滋養機能充盛スルヿ最モ盛ニ、又此時ハ滋養過多トナリ易シ、又其部固性分増多シ、血液減少シ、細脈管消滅スレハ、色ヲ失シ、灰白乏血トナル、故

ニ腦質、骨質ノ滋養過多ハ、平時ヨリハ更ニ灰白色ナリ、

原因

滋養ノ機能ハ、各部、各器、各細胞體固有スル所ノ同化機ニテ、血中ノ滋養分ヲ攝取シ、營養發育ヲ為ス者ナリ、細胞體成形力、此ノ如ク滋養分ヲ攝取シ、之ヲ同化スルハ、滋養過多ヲ發スル最原ニメ、又是レ燃衝トノ別アル所ナリ、燃衝機能ハ、上ニ說クカ如ク、何レノ部ニ發スルモ、必ス内部組織ノ營養增多スル者ナリ、故ニ滋養過多ハ、燃衝ノ續症ナリトスルハ粗論ト云フヘシ、血液增多ハ、滋養增多スルノ一因ナリ、實ニ多血ナレハ、其部ノ血液輻進スル刺戟ニ由テ、同化機增進スルカ故ニ、滋養過多ノ遠因ト云フヘシ、然レ𪜈、多血ナレハ必ス營養增多スル者ト、偏信スル1勿レ、

一部機能亢起スルニ由テ、滋養過多トナルアリ、膀胱、胃ノ筋纖維ニ於テス、此ノ如クナレハ、其空隙狹窄トナリ、大ニ收縮力ヲ增多スルナリ、慢性燃衝ヲ發スル組織ノ近部ハ、血液輻進持續スルニ由テ、滋養過多トナリ易シ、脚ニ慢

性腫瘍ヲ發スレハ、近傍ノ脛骨滋養過多トナルカ如シ、クリヘール氏、

桔槔機、又交感機ニ由テ、滋養過多トナルアリ、

一部滋養減少、機能失宜ハ、却テ桔槔機ニテ他部ノ滋養増多ヲ發スルヿアリ、一腎萎縮シテ一腎膨大トナルヿアリ、截腹術ヲ施コスノ後、脂肪膜滋養過多トナルアリ、胸腺ト甲狀腺ト交感ニ由テ、同一時ニ滋養過多トナルヿアリ、又乳房、耳腺、睪丸、両側同時ニ滋養過多トナルヿアリ、

敗血ニ由テ滋養過多トナルヿアリ、失苟兒陪苦ノ人、舌、上唇、鼻翅、滋養過多トナリ、又癩病ニ贅肉ヲ生スル者ノ如シ、但シ其理ハ未タ之ヲ詳ニセス、又別ニ敗血家ニ發スル假性滋養過多ト稱スル者アリ、肝脾腎ニ發ス、宜シク混スルヿ勿ルヘシ、

又營養發育ノ機、失宜スルニ由テ、滋養過多トナルヿアリ、副腎、胸粘液腺、子宮、胸腺ハ、一時間ノミ發育スヘキ者ナリ、然ルニ其營養發育ノ機能持續シテ退カス、遂ニ滋養過多病狀ニ陷

ルヿアリ、稟賦心藏滋養過多ノ者、此類ニ屬スヘシ、カルス氏空ル胎兒心藏肉質肥厚、内空狹窄、大人ニ比スレハ、其厚サ倍スル者アリ、而ノ發育スルニ方テ、其平均ヲ得ルヿ能ハサレハ、亦滋養過多ニ傾クナリ、

續症、及經過、

滋養過多トナレハ、自然ノ妙機ヲ害スルヿ左ノ件々ニアリ、

一 患部機能平ヲ失シ、多クハ減退ス、心藏滋養過多ナレハ、機能增多スルカ如クナレ𪜈、血液ヲ射出スルノ彈力減スルカ故ニ、其質ノ肥厚ナルニ平準セス、是レ其運營强盛ナルカ如シト雖、其實ハ力ナシ、

二 壓迫スルニ由テ、近傍部窘迫、狹窄、機能ヲ失ス、

三 全身ノ營養機能失宜ス、

經過迅速トナルノ原ハ、刺衝ナリ、生活機能ノ亢起ナリ、患部偶然ノ變、又自然ノ變ニ由ル運營增進ナリ、經行間、又妊娠中ノ子宮ノ如シ、又從來ノ病機抵抗亢起スルナリ、凡ソ滋養過多ノ部ハ、煩衝或ハ他ノ諸症ヲ發スレノ原トナル、多クハ經過緩慢ナリ、

近傍部ノ静脈、列印巴管ヲ壓迫スルヨリ、水腫狀トナリ易シ、之ニ由リ、又須要ナル機能ヲ障害スルニ由リ、滋養機能失宜スルニ由リ、消耗スルニ由リ、遂ニ死スルアリ、然レドモ或ハ稀ニハ滋養過多ノ者、其機ヲ一轉スルヿアリ排泄諸器ニ於テ多クハ然リ、其部ノ排泄ニ由テ、滋養分ヲ漏泄スルニ由ルナリ、故ニ膽汁分泌増多スレハ、肝腫消散シ、經行過多、隨テ子宮滋養過多ノ者、消散スルヿアリ、

治法

滋養過多ナル者ニ於テ、外用諸法効ナキ者ハ、内用諸法固ヨリ効アルヘキニ非ス、抑モ全身ノ運營機能ヲ變スルニ由ル者ナレハ、直チニ患部ノ運營ノミヲ減損シテ、全身ノ滋養ヲ害セサルヿ能ハサルナリ、一部ノ營養ヲ減セントスレハ、則チ全身ノ營養ヲ損シ、又全身ヲ營養スレハ、物質交代引力亢盛トナリ、隨テ更ニ患部ヲ營養スルナリ、故ニ滋養過多ヲ處置スルニハ、勉テ患部ノ運營ヲ減損排去スルノ外他策ナシ、其部ヲ刺戟スル者ヲ減退スルノミ、例之心藏滋養過多ニハ、

脈管系ヲ刺戟スル因ヲ避ケ、起熱性ノ飲食ヲ禁シ、子宮滋養過多ニハ、房事ヲ禁ス、諸法効ナキ者ニハ、減食法ヲ試ムヘシ、最有力ノ治法ハ、強力ノ誘導劑ナリ、

一種ノ異効ニテ、各部ノ滋養ヲ減損スル品アリ、沃實湟ハ乳房ヲ萎縮シ、兼テ甲狀腺ノ膨腫ヲ減小ス、然レトモ各種ノ滋養過多、皆之ヲ用フヘキニ非ス、却テ無患ノ諸部ヲ害セサルヲ得ス、水銀亦滋養機能ヲ減損スルノ効アリ、但シ是レ全身ノ血液ヲ變敗スルニ由ル所ナリ、

又實質ヲ減損スル一法アリ、瀉血是ナリ、直チニ患部ニ局部瀉血ヲ行フナリ、然レトモ此法亦効少ナシ、局部適度ノ滋養ヲ得ルニ至ルノ前ニ於テ、早ク既ニ全身之血、或ハ水腫ヲ發スルナリ、他ノ誘導法、下劑ノ如キモ亦然リ、大便ヲ疎通スルノ劑ハ、分泌器ノ滋養過多ノ者ニ普ク施用スヘシ、但シ直チニ患部ヲ刺戟スル者ハ害アリ、

滋養過多ノ部ニ於テ、其大脈管ヲ緊紮シ、或ハ神經ヲ截斷シ、或ハ此二法ヲ併セ施コシ、以テ

病性滋養過多ヲ減損スルヿヲ得ヘシト云フ
説アリ、但シ此法ハ、胸腺、睪丸等ニノミ施コス
ヘシ、最モ其部位ヲ撰フヘキナリ、滋養過多ノ
部、外用劑ヲ施コシ得ヘキ者、例之、膽嚢、睪丸、胸
腺等ハ、壓定法ヲ以テ其増育ヲ防クヘシ、
抑モ滋養過多治法ノ要ハ、原因ニ應シテ處置
スルニ在リ、

侃斯達篤卷之五 終

内閣文庫

神白樓梓